

主 題：主にある家庭生活⑤：主人と奴隷

聖書箇所：コロサイ人への手紙3章22節－4章1節

テーマ：神様から主人と奴隷に与えられた責任とは何か？

私たちは先週、主にある家庭生活、特に主人と奴隷の関係についてコロサイ3：22-4：1を考え始めました。きょうもその続きを一緒に見ていきます。では、まずはいつものようにみことばをお読みしますので、前回の内容を思い返しながらかそれぞれ神様のことばによく耳を傾けてみてください。

コロサイ3：22-4：1

「:22 奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。:23 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。:24 あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。:25 不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」

さて、きょうの内容に入る前に少し思い出してみてください。私たちは今パウロのことばから、特に「奴隷」について学んでいました。この当時、奴隷というのは、家庭の中だけでなく、社会の中にも数多くあふれていた存在でした。今私たちが周りを見渡してみても、その姿を見ることはありません。でもこの時代、人口の半分以上を占めるとまで言われた数多くの奴隷は文字どおり町中にあふれ、いろんな仕事を行っていました。商業を担う者もいれば、教育や医療を担う者もいました。農業や鉱山などで肉体作業に励む者もいました。彼らは主人から任された責任を忠実に果たして、どんな主人であろうとも、ただ仕えていたのです。そんな奴隷たちの置かれていた境遇は良いものだったのでしょうか？確かに主人たちの中には彼らを大切に扱い、あわれみを示す者もいました。ただ基本的には奴隷の生活は厳しくて、ひどいものでした。彼らの多くは主人から物のように扱われ、理不尽に苦しめられ、いのちを落とすことさえ多々あったのです。それが、「奴隷」という存在でした。でもそのような奴隷にもキリストの福音が届いたのです。彼らも同じように、恵みによって、信仰によって救われました。そしてそんな彼らに、パウロはこの箇所、主にあって託された大切な責任を伝えていたのです。

○主従関係における奴隷の責任：主人に従うこと 22-25節

その責任とは、「主人に従うこと」でした。もちろんこれは、自分勝手な方法でただすれば良いという話ではありません。だからこそパウロはこの「主人に従う」ということに関して、どんな態度でなしていくのか、その具体的な姿を教えてくださいました。それが先週、22-23節で見たことでした。この中には否定的な二つの態度と、肯定的な三つの態度が挙げられていました。

1. 態度：従うとはどのような姿なのか？ 22-23節

奴隷たちというのは、人のごきげんとりのような態度や、うわべだけの態度で仕えるのではなくて、むしろ、主を恐れかしこむ態度、真心から従う態度、すべて主のためにする態度で喜んで仕えることが言われていました。言いかえると、見せかけだけのパフォーマンスや主人の目がある時だけ一生懸命になるのではなかったのです。どんなときも変わらずに主に信頼し、一つの心で主の栄光のために従っていくということが、問われていたのです。地上の主人だけでなく、いや何よりも天の主人が喜んでくださるように、彼らはいつも心から仕えていくことが求められていました。それが、当時の奴隷たちに与えられた責任でした。そして、それが今の私たちにも求められていたことだったのです。だからこそ、

私たち自身も絶対に忘れてはいけませんでした。どんなことも同じです。たとえ私たちが仕事で上司に従うときも、それ以外も、家庭や教会でだれかに仕えようとするときも、私たちがなしているすべてのことは、天の主人であるキリストのためになしているということです。そして、私たちがそのためにすべてのことをなしているがゆえに、私たちも仕える者にふさわしい態度でもって、どんなときも、どんな状況にあっても、どんな責任やどんな相手に対しても、みずから進んで従っていこうとするわけでした。

## 2. 動機：従うとはどうしてなのか？ 24-25節

でも皆さん、当然これは容易なことではないでしょう。先週の内容を聞きながら、あまりにも厳しいと思った人もいるかもしれません。ましてや当時の奴隷たちを考えれば、奴隷たちが乱暴な主人に喜んで従い続けていくということには、大きなチャレンジが伴うものでした。パウロはそのことをよくわかっていました。だからこそ、彼はただ態度を挙げて終わりではなかったのです。それに続けて、人々を励ますために、動機というものも教えていました。24-25節で、どうして奴隷たちは主人に従っていくべきなのか、その励まし、動機を二つ見て取ることができます。パウロは奴隷たちをどんなふうに励ましていたのかを、一緒に考えてみましょう。

### ●二つの動機：

#### 1) 天の主人が祝福を受け継がせてくださるから 24節

では、まず一つ目の内容が24節に記されています。「あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。」どうして奴隷たちが主人に従っていくのか、一つ目の動機は、「天の主人が、祝福を、受け継がせてくださるから」でした。いつの日か必ず主がふさわしい報いを与えてくださる、と知っていること、それが奴隷たちにとってどんなときも主人に忠実に従う原動力となるのです。

#### ▶「報いとして」

ここで皆さんに注目してほしいことばが二つあります。まず一つ目に見てほしいのは、パウロはここで「主から報いとして」と宣べていました。この「報い」というものですが、これにはもともと「だれかが行ったことに対する対価として与えられるもの」「報酬」とか「見返り」といった意味が含まれています。行ったことに対する対価として与えられるものです。もちろんこれは「恵み」とは違います。

「恵み」というのは、何かを受けるに値することをいっさい行っていない者に与えられる、「ギフト」のことでした。だからこそ私たちの救いは、神様の恵みでした。ローマ3：24にもこう書かれています。「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」自分自身の何らかの行いによって救われた者など、ひとりとしていません。ただキリストのみわざによって救われました。私たちはみな、本来であれば決して値しなかったものを、恵みの賜物として受けたのです。でもパウロはここで、そんな「恵み」ではなくて、「報い」ということばを用いていました。つまり奴隷たちは、彼ら自身が一生懸命忠実に働いたその対価を、報酬としていつの日か受けるのだということです。

ここで少し思い返してみてください。先週も言いましたが、当時の奴隷たちの置かれていた境遇というのは生優しいものではありませんでした。彼らのことを心から気にかけるすばらしい主人がいる一方で、法律上、人ではなくて物とみなされていた奴隷をひどく扱うような主人は数多くいました。奴隷たちは主人のきげんによって暴力を振るわれたり、むち打たれることもありました。最悪の場合、奴隷たちのいのちに関しても権限を持っていた主人の勝手な意向でいのちが奪われることもありました。こうして、当時の奴隷たちは主人の気まぐれにすべてが左右されてしまう恐怖を持っていたのです。そしてそんな主人に日々従っていく中で、奴隷が一生懸命に仕えても正当に評価されないようなことも多々あったでしょう。へとへとになるまで頑張って頑張って、喜んで犠牲を払って払って働き続けていたとし

でも、気ままな主人がそれを全く認めようともせずに、逆に罰を与えるようなことだってあったりしたでしょう。奴隷たちの中には、もうまさに正当な理由で、いやいや、主人の対応は絶対に間違っている、と口にすることができる場面もあったでしょう。そのような状況にいる奴隷たちに向かって、パウロはまずこう言うのです。「忘れてはいけません。あなたがたの主は、正しく報いてくださる。地上の主人は正しい評価を与えてくれないかもしれない。不公平さや理不尽さを覚えるような場面は今もあるかもしれない。でも、天の主人は、将来必ずふさわしく報いてくださる。そのことをあなたがたも知っているでしょう。」と。

#### ▶「御国を相続させていただく」

またこれに加えて二つ目に、「御国を相続させていただくことを知っています。」と言っていました。ここで「御国を相続させていただく」と言われているこの「御国」と訳されていることばは、もともと「遺産」とか「相続財産」といった意味が含まれています。覚えていてほしいのは、この当時の奴隷たちには、そもそも遺産を相続する権利などはなかったと言うことです。ある家族に代々受け継がれてきた財産があったとすれば、それはその家族の一員だけが受け継ぐことができました。祖父母のものがあれば祖父母のものは両親に、両親のものがあれば両親のものは子どもに、子どものものはまたその子どもにと、ドンドンとバトンが受け継がれていったのです。だからこそ、家族の一員ではないその奴隷には、初めから遺産を受けるといった権利などなかったのです。本来ならその身分にある彼らには、いっさい何も用意されていませんでした。でもすごいのは、そんな奴隷たちもキリストの福音によって救われて、そして神の家族に属する者として召されたということです。ほかの兄弟、姉妹と同じように、彼らも同じ神様を父と呼ぶ、そんな子どもへと変えられたのです。そして、子どもであるなら、同時にその者は、相続人でもありました。この原理を別のみことばもわかりやすく教えてくれています。ガラテヤ 4：6-7にこう書いています。「：6 そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。：7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。」と。こうして文字どおり何も持たなかった奴隷は、ただ神様の恵みによって、遺産を受け継ぐことのできる神の子どもとなったのです。奴隷たちにも同じようにすばらしい祝福が、神様によって天に用意されているのだというわけです。そしてそのような奴隷たちに向かってパウロは言います。「以前皆さんは何も持たない奴隷でした。そんなあなたがたを神様が救って、遺産を受け継ぐ、相続できる者へと変えてくださったのです。そして今、恵みによって豊かな祝福が天に蓄えられています。でも、蓄えられているのだからこそ、そんなあなたがたはますます地上において忠実に仕えていきなさい。そうすれば、天の主人は必ず後でその働きに大いに報いてくださるのです。そのことをあなたがたも知っているでしょう。」と。

私たちは忘れてはいけなことがあることがあります。それは、確かに私たちの救いも、あらゆる祝福も、ただ神様のあわれみのゆえでしかありません。でも同時に、そのあわれみを受けたのなら、その者は、忠実に仕える者として必ず報いてくださる主の報いに期待しながら、与えられた務めを熱心に果たしていくことが欠かせない、ということです。それが、救われたすべての者が持っている大切な責任なのです。

当時の奴隷たちも同じでした。これまで見てきたように、間違いなく彼らの置かれていた境遇は厳しいものでした。その中で主人に心から従い続けていくのは、当然難しさや大変さが伴うものでした。私たちが想像できないほどに、日常生活の中で彼らはひどく扱われたり、望むものが与えられないというような場面もあったりしたのです。でも、そんな彼らが自分たちの将来に待っているこの約束を覚えれば、彼らは大きな希望にあふれていたと、容易に想像できません？たとえこの世では何も相続できなかったとしても、たとえこの世では地上の主人から正当な評価を受けられなかったとしても、天ですべてをごらんになっておられる真のまことの主人が、その働きに必ず報いてくださる日がやって来ると。地上のどんなものとも比べることのできない最高の祝福が、喜びが、彼らのことを待っていたのです。

「すべてがきちんと清算される日はやって来ます。」と。この揺るがない事実こそ、奴隷たちが熱心に主人に仕え続けていくための動機でした。

そしてその動機を知っている彼らに、パウロはまたこんなことばを口にするのです。24節の最後にこう書いていますね。「あなたがたは主キリストに仕えているのです。」と。おもしろいのは、この箇所阅读原文を見るとこんなふうにも訳すことができます。よく聞いてください。「あなたがたは主キリストに仕えなさい。」と。そのように命令でも訳すことができるのです。でもよくわかりません。パウロが言わんとしていたことは、奴隷たちが仕えていたのは、究極的には地上の主人ではなく、天の主人、主キリストだということです。彼らを罪から救い出したその救い主、すべての支配と権威のかしらであって、必ずすべてに正しく報いられる、そんな神の御子、その主人が喜ぶように彼らはどんなときも心から従い続けていく、いや従い続けていきなさいと。奴隷たちはその責任を負っていたというわけです。

そしてこれは今の私たちも同じです。改めて考えると、私たち自身も仕えることに難しさやためらいを覚えてしまうようなことがあります。皆さんはどんなときに難しさを覚えます？自分のした仕事の成果がきちんと認められなかったとしたら、自分の払った労力にふさわしい評価を、対価を上司からしてもらえなかったとすれば、仕えることに熱意を失ってしまうことがあるかもしれません。ただ認められないだけではなくて、逆に不当な扱いや不公平に思えるような対応をされてしまえば、喜びを失って、従うこと自体を拒み始めてしまうかもしれません。またこれは職場だけの話ではありません。家庭や教会においても同じです。例えば自分がしていることをだれからも認められなかったら、感謝されなかったら、次第に見た目は仕えているようであっても心は遠く離れているかもしれません。どうでしょう？私たちはそんな弱さや葛藤に日々直面することがあります。いったいどうすればみことばが求めているように、どんなときも主を恐れかしこみつつ、真心から従っていくことができるのでしょうか？

その一つの鍵は、この世のことではなく、将来に待っている約束に心を留め続けることでした。地上の主人ではなくて、皆さんの一つ一つの働きを必ず正しく評価してくださる天の主人の報いを私たちが覚え続けることでした。もちろんひとりひとりが置かれている状況は全然違います。喜んで自分が犠牲を払ってなしているそのことが、だれにも気づかれないようなこともあるかもしれません。正当な評価をその場で受けないこともあるかもしれません。でも、そんなときこそ失望するのではなくて、思い出し続けてください。そんなあなたのなしていることをだれも見えていなかったとしても、ごらんになっている方がおられるということを、です。すべてがきちんと清算されるその日は必ずやって来るといことです。もしかしたら難しさを覚える中で、この地上での一生が今は長く感じている人もあるかもしれませんが。でも永遠と比べてみれば、この世は一瞬にして消え去ってしまう霧にしか過ぎませんでした。ヤコブがはっきりとこう宣べていました。ヤコブ4:14-15「:14 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。:15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」私たちにとって大切なことは、天の主人と、そこに永遠に待っているものに、目を向け続けることでした。確かに私たちを待っているその約束に期待しながら、主人から与えられた責任を心から一生懸命に果たしていくことです。それがみことばの教えている、従っていくための一つ目の原動力、動機でした。

## 2) 天の主人が不正の報いを与えられるから 25節

▶「不正」(アディケオ=ア「反対」+ディケオ「正義、法律、基準に沿った正しさ」)

次に二つ目の動機の内容が25節に記されています。パウロはこの25節で、注意も伴う励ましを与えていました。こう書いています。「不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。」と。どうして奴隷たちが従っていくのか、二つ目の動機は、「天の主人が不正の報いを与えられるから」でした。ここで登場していた「不正」ということばには、「アディケオ」とい

うギリシャ語が使われています。このギリシャ語を見るとわかるのですが、頭の部分に付いている“ア”ということばは、「反対、逆」を表しています。そしてその後の“ディケオ”ということばは、「正義」とか「法律や基準に沿った正しさ」を表しています。それがくっついてできているのです。つまり“アディケオ”ということばは、正義の反対でした。基準から外れている「過ち」や「間違い」「不正」といった意味を持っているのです。スティーブ・ローソンという先生もこのことばを次のように説明していました。「正しさとは、基準に従っていることを意味します。それゆえに、主人に仕える上で曲がったことをするのは不義であり、罪なのです。そして、それは様々な形を取ります。主人の命令に従わないこと、全力を尽くさないこと、間違っただけで仕えることです。主人から盗むこと、主人に嘘をつくこと、他の奴隷と分裂し、劣悪な労働環境を作ることです。それらは間違いであり、罪なのです。」（スティーブ・ローソン）

ここでもう一度、当時の奴隷の立場に立って改めて考えてみてください。彼らはどんな誘惑に陥る危険性があったのでしょうか？例えば、どんなに一生懸命働いていても、それを認めずに不当な扱いをするような主人だったとしたら、どうなります？ああ、わかりました。認められないなら、私も全力を尽くす必要はありませんね…。と考えるようになったかもしれません。もちろんそんな主人でも逆らえば厳しい罰があるということはわかっている以上、主人の前ではきげんをとって主人がいなくなれば怠けるという、そんなうわべだけの態度で仕えるようになったかもしれません。また加えて、今まさに奴隷たちは、地上の主人ではなく、天の主人がいつか必ず報いてくれること、自分たちのための資産が用意されているということを聞いたので、一部の者たちは、じゃあ、もう地上のことなどどうでもいい、天にそれが用意されているなら地上はどう生きてって構わない、地上の主人が何を言おうが心から従う必要はない、と考えるようになったかもしれません。だからこそ、パウロは彼らに言っていたのです。「皆さん、確かにキリストにあってこの先には素晴らしい祝福が待っています。それはそのとおりです。でも、もしあなたがたが地上で忠実に仕えないのであれば、それにはそれ相応の結果が伴うこととなります。報酬ではなくて、自分の行った不正の報いを受けるようになります。」と。しかもそのことを強調するのに最後にパウロはこんなことばを使っていました。25節の最後にこう書いていますね。「それには不公平な扱いはありません。」と。

#### ▶「不公平な扱い」

「不公平な扱い」とは何でしょう？このことばは興味深いもので、もともとは「顔」を意味するギリシャ語と「受け取る」を意味するギリシャ語の二つが組み合わさってできたものでした。文字どおりに言えば、これは「顔を受け取る」という意味になるのです。顔を受け取りました、と言っても意味がわかりませんね。でも、この当時の人たちにはよくわかることでした。かつて挨拶の習慣として、人々は地面に顔を伏せるということを行っていたりしました。地面に顔を伏せるのです。そして挨拶された側の人間が、挨拶した人の外見を見てその人を受け入れた場合、その人は再び顔を上げることが許されていたのです。その人の内側ではありません。外側の部分だけを見て、受け入れるか受け入れないかの判断がなされていたのです。皆さん、これを何と言います？不公平でしょ。でもまさに、これが、このことばが含んでいる意味でした。「不公平な扱い」というのは、「外側のものとか先入観に基づいた判断」

「偏愛」や「えこひいき」のことを表していたのです。内側ではなくて外側を見てえこひいきをするようなこと、不公平なことをすることを表していたのです。ですからパウロは、「そんな不公平な扱いというものは、天の主人の前では存在しません。」と口にしていたのです。「主は、周りの人たちがするように人の外側だけをごらんになってそれで判断するようなことは、絶対になさいません。えこひいきなことをなさるようなお方ではありません。この方は人の外側も心の内側もすべてをごらんになった上で、その人にふさわしい応答を、その人にふさわしい報いを与えられるお方だ。」というわけです。エペソ6：9を見ると、パウロは主人たちに対しても同じことを宣べていました。「主人たちよ。あなたが

たも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。」すべてをご存じの天の主の前では、不公平な扱いというものはあり得ませんでした。すべての者がそれぞれの行いや心の態度に従って、それにふさわしい結果を、それにふさわしい報いを受けるのです。その公平な扱いを前にして、だれひとりとして言い逃れや言い訳ができる者などいないのです。

でも、ある人はこれを聞いて少し混乱しているかもしれません。ここでパウロは、救われている者がさばかれて救いを失う可能性があるかと教えているのでしょうか？…と。もちろん、そうではありません。一つ目の動機の中でも触れましたが、救いというのは、最初から最後まですべて神様の恵みのみわざでしかありませんでした。自分の行いや努力で勝ち取ったものではなく、ただ主のあわれみによって与えられたものであるからこそ、私たちが失ってしまうようなことは決してないのです。イエス様もはっきりと約束してくださっていました。ヨハネ5：24を見ればこう書いています。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」また同じヨハネ10：28-29にもこんなふうに記されていました。「：28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。：29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」と。またこのことばを記していたパウロ自身も、キリストのうちにある者がもう罪に定められることはないのだと、明白に教えていました。ローマ8：1にも「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と。ですから、救われた者がその救いを失うということはありませんでした。永遠のさばきにあうこともありませんでした。もうそれはないのです。でも同時に、救われた者にはそれぞれ大きな責任が伴うということです。この地上で、主に対してどれだけ忠実であったのかを問われる日はやって来る、ということです。そのことをパウロは別の箇所でも教えてくれました。Ⅱコリント5：9-10にこんなふうに書かれています。皆さん、パウロは信仰者に対して、こんなことばを宣べていました。9節から「：9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。：10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。」これを読んでいて、皆さん、気づきました？すべてのことにおいて主を喜ばせたいと願っていたパウロ、そのパウロを動機づけていたものは何でした？それは、私たちが今見ているものと同じでした。いつの日かキリストの前で、己のした行為に応じて報いを受ける日がやって来るというその事実。その事実が、あのパウロのことも動機づけていたのです。しかも皆さん、特に彼のことばの中の二つの点に注目してみてください。

#### ▶「私たちはみな」「各自」

まず一つ目に、パウロは10節で「私たちはみな」とか「各自」と宣べていましたね。10節をよく見ると「なぜなら、私たちはみな、」と。その後「各自その肉体にあつてした行為に応じて」と。「私たちはみな」「各自」と。言い換えれば、パウロも含めてすべての信仰者たちがキリストの前に立って報いを受ける日はやって来る、というわけです。もしこの兄弟姉妹の中に、私には全く関係のない話だと思っている人がいるなら、あなたも必ずこの審判者の前に立つ日はやって来ます。地上では、私たちはいくらかでも外側を取り繕うことができます。心の態度に関しても、私たちが間違っていたとしても私たちの周りの人には気づかれないかもしれません。でも、この主の前に私たちが立つ時、この主の前には何一つとして隠れているものは無いのです。そんな主の前に立って、私たちはみな、この地上で主のために忠実になしてきたすべてのことに応じて、各自がその報いを受けるようになる、というわけです。

#### ▶「善であれ悪であれ」

また二つ目に、パウロはここでこんなふうにも言っていましたよね。「善であれ悪であれ、各自その肉体にあった行為に応じて報いを受ける」と。ここで言われていた「善であれ悪であれ」ということばですが、これはおそらく多くの人たちがすぐに思い浮かべるものとは違います。特にこの「悪」ということばを聞いたときに、善悪の悪のこと、道徳的な悪のことを考えた人がいるかもしれませんが、実はここで使われていることばは、そうではありませんでした。ここで使われていることばにはもともと、「価値がない」とか「役に立たない」といった意味が含まれているのです。つまりパウロがここで言わんとしていたことは、信仰者はいつの日か必ず、地上でなした価値のあることと、価値のないものに基づいて主から報いが与えられるのだ、ということです。マッカーサー先生もこのことばに関してこんな説明をしていました。「悪という言葉は、散歩をする、買い物に行く、田舎をドライブする、更に上の学位を取得する、出世する、絵を描く、詩を読むなど、本質的には永遠の価値も罪深いものでもない、日常的なことを指しています。これらの道徳的に中立な事柄は、信仰者がキリストの裁きの座の前に立つときに裁かれるのです。神を賛美する動機で為されたものであれば、善と見なされます。利己的な利益のために追い求められたのであれば、悪と見なされるのです。」(ジョン・マッカーサー) 問われていたのは、私たちの動機でした。忘れてはいけません。信仰者に待っているものはもう明白でした。私たちはみな、私も皆さんひとりひとりも、いつの日か必ずイエス・キリストの前に立つ日がやって来るということです。そしてその日には、私たちの行った人生のすべて、行いや態度も明らかにされ、そしてその日、主のためにそれぞれがなしてきたあらゆる働き、あらゆる奉仕が、その動機に至るまで主によって正しく判断されるということです。そしてその時、本当に価値のない無益なものは取り除かれます。正しくない動機で行われていたものも、見せかけだけだったものも、まるで木や草やわらのように燃えてなくなってしまいます。でも同時に、私たちがキリストの福音のために、神様の栄光のためになし続けてきた永遠に価値あるもの、そのすべての働きに関しては、報われるということです。確かに日々の中で困難なことがあって、神様のために生きていくことに難しさを覚えることもあるでしょう。でもその困難の中においても、私たちが喜んで主の御名のために仕え続けていくのだとしたら、必ず主はそれに心を留めてくださって、ふさわしい報酬を与えてくださるというわけです。それが、みことばが教えている約束でした。そして、天の主人が必ず報いを与えてくださることを覚えていたパウロは、地上に置かれている間、最後まで熱心に神様と人ともに仕え続けていたのです。自分を救ってくださったその主の前に喜ばれる、本当に価値のあるものを追い求め続けていたのです。だから、最後に彼は確信を持ってこう言うことができたのです。Ⅱテモテ4:7-8「:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と。パウロは、どんなものが自分を待っているかをわかっていました。そしてそれが、彼の心を励まし、主の前に忠実に歩むというその生き方を生み出し続けていたのです。

では皆さん、私たち自身はどうでしょうか？果たして私たちは、いつの日か天の主人の前に立つ日がやって来るということを覚えながら、すべてのことをなしているでしょうか？ふるまいだけではなくて、心の動機さえも今もご存じであられるその方に心を留めながら、喜んで仕えようとしているでしょうか？皆さん、「よくやった。忠実なしもべよ。」と言ってくださる方は、その忠実さに報いてくださるお方だということです。天の主人、そのお方は今も私たちの歩みをごらんになっておられます。人の目はいくらでもごまかせますが、このお方の目をごまかすことはだれにもできません。隠れて行っていることすら、すべて明らかにされます。そんな方の前に、私たちは不正を行って、天で手にすることができたはずの報酬を手放すことなどないように、救われた喜びを心から感謝しながら、そして主にお会いするその日を楽しみにしながら、最後の最後のその日まで、忠実に仕え続けていくことです。それが、みことばの教えている、従い続けていくための二つ目の原動力、動機でした。

## ○主従関係における主人の責任：奴隷に正義と公平を示すこと 4章1節

そして最後に、奴隷に対してその責任を語っていたパウロは同じようにして、主人たちに向かっても大切な責任を与えていました。コロサイ4：1にそのことが簡潔に記されていました。「主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示さない。」主人の責任は、「奴隷に正義と公正を示すこと」でした。ここで言う「正義」というのは「正当に正しく扱うこと」、「公正」というのは「みなを平等に扱うこと」を表しています。つまり、主人たちは奴隷たちに対して、必要以上に厳しくしたり脅したりするのではなく、ひとりひとりを正当に等しく扱うことが求められていた、というわけです。

でもいったい、どうして彼らはそんな態度を取ることが求められていたのでしょうか？この当時のことを考えてみれば、多くの地上の主人たちはごく普通に奴隷たちを雑に扱っていたわけです。その力や権威を確かに彼らは持っていたのです。でもどうしてそういうふうにしらないのか？その答えはシンプルでした。パウロはこう言っていましたね。「主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから」と。奴隷たちにとっての本当の主人が、天におられるキリストであると同様に、主人たちの主人も、天におられる同じキリストでした。いつの日か奴隷たちが天の主人の前に立ってふさわしい報いを受けるのと同じように、主人たちもまた、天の主人によって正しい評価が下される日がやって来るといいうわけです。だからこそ彼らも、同じ兄弟姉妹である奴隷たちを、主にあって大切に扱っていくという必要があったのです。仕える者に責任があるのと同じように、仕えられる者にも大きな責任がありました。こうしてそれぞれが神様から託された責任を忠実に果たしていくことが求められていたのです。

さて、私たちはきょう、奴隷と主人の関係を考えてきました。終わりに一つ、改めて覚えていてください。「私たちはみんな、ここにいるひとりひとりもみんな、生まれながらに奴隷だ」ということです。みことばは、キリストによって救われる前の私たちは罪の奴隷なのだ、とはっきりと教えています。私たちが罪の奴隷として生きていたからこそ、その歩みは、まさに主人である罪に支配されていたわけです。私たちが考えることも、思いも、意志やふるまいも、そのすべてが罪によって汚染されていました。でもそんな私たちを、キリストが贖ってくださいました。キリストの血潮によって買い取られたその時、私たちは罪の奴隷から解放されて、キリストの奴隷となったのです。罪の奴隷としてあった者が、義の奴隷となりました。ローマ6：17-18にもこう記されています。「：17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、：18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」こうして、かつて罪の支配にあった者が、罪を主人として生きていた者が、今キリストを主人として歩み、この方を喜ばせ、この方の栄光を現す者として生きていくことができるような者へと変えられたというわけです。だからこそ皆さん、問われるのは、あなたは奴隷ですか？ではありません。「あなたはきょう、だれの奴隷として歩んでいますか？」ということなのです。

そしてもし、まだ罪の奴隷として生きているなら、まだ罪を愛し、罪に従い、罪のもたらす滅びへと向かっている人がいるのなら、どうかそんなあなたを救い出すことのできるキリストの助けを、今求めてください。罪を贖うことができるそのあわれみ深い救い主、この方のもとに助けを求めて出てください。そしてこの方を救い主として、主として信じ受け入れてください。あなたにはどうすることもできないその罪の支配から解放してくださる主を愛し、この主とともに歩む最高の喜びをどうかきょう知ってください。

また今、キリストを自分の主人として、この方の奴隷として歩んでいるという皆さん。この地上にある限り、私たちは罪との葛藤を覚えることがあります。でも、私たちはもうキリストにあって罪の奴隷ではありません。かつては罪の奴隷として生きていたがゆえに、その支配に屈していました。でも、今は違います。その支配に身をゆだねる必要はないのです。むしろ、私たちはかつての主人に従うのでは

なく、新しい主人に今喜んで従っていくことが求められるのです。この主の栄光を現すことを熱心に求めて生きていける者へと変えられている以上、求めて生きていくことです。永遠に価値のあるものに心を留めて、必ず報いてくださるその天の主人を心から愛して、最後の日まで地上で仕える者として、ともに歩み続けていきましょう。